

イエイツと佛教思想〔二〕

——アイルランド詩人イエイツの禪思想について——

伊藤 宏 見

Whatever stands in field or flood,

Bird, beast, fish or man,

Mare or stallion, cock or hen,

Stands in God's unchanging eye

In all the vigour of its blood;

In that faith I live or die' W. B. Yeats

一如體玄兀爾忘緣

萬法齊觀歸復自然

泯其所以不可方比

止動無動動止無止信心銘

—

イエイツは己れの肉體が結局は滅びて無に歸してしまうことを豫知して、人間のつくりだすもの、いや真理すらも含めて無にならざるをえないと考えた。かくして、彼のものの見方に即非の考が宿るのである。前掲の詩行は單に自然の落想を詠じたものではない。彼のかすかな美的汎神論と禪悦がよ

みとれよう。

趣味溢れくる詩趣を感取することができる詩は、われらが求めて築きあげる真理への創造も畢竟じて形而上學にならざるをえないと教えるのである。真理も人が把握する時は形而上學でしかない。形象のうつろいやすさに對する恨みがイエイツの心に深く根ざしていて、彼の藝術創造の根本となり、これが幾多の機縁に出あつて珠玉の詩品を生んだのである。

彼の描くイメージも彼の特異な觀點に立つ形而上學であり、彼の藝術創造の心理過程はいつもメタフィジックを如實に人々の心にうつたえるための言葉を探すことであつた。中期晩年、彼の描く強い欲求をはらんだイメージは的確に、しかもイネビタブルな表現を生んだ。丁度それは、久しく鬱積していた表現欲が俄然堰を切つた水のように彼の poetic creation から流れ出たのである。

荒々しい現實にたたかい、苦惱にさいなまれた現實の生か

ら、感受性のするどい彼は日本の禪畫を次のように述べてゐる。

Painters of the Zen school of Japanese Buddhism have
the idea of the concordance of achievement and death,
and connect both with what they call 'Poverty'⁽³⁾

彼は禪畫に湧いてくるきわめて追いつめられた生の緊張と枯淡な描出を快いものとしてみとめる。或は禪匠の生と死の完成という達觀した境地をみとめてゐる。

イエイツは己れの藝術創造のもととなつてゐる靈的な絶対性を感じ得る mind's eye をもつてゐる。イエイツの「心眼」は「弟子の本具せる心中の曼荼羅を開發せんがため」心眼を開かせるという藝術的宗教を奉ずる密敎家の持つそれと等しいものである。「心眼」から感得しえた藝術的な美的汎神主義は彼の好んで用いる Anima Mundi の精神を絶対呪縛にする陶酔をめざすところに由來するものであり、これが彼の藝術創造の爲の理想環境であるといふことができる。

一方イエイツには灰頭土面をした人間の現實的な生の刻苦と忍従とに要する「冷眼」 a cold eye 或は「鷲のような眼をこつ」 with an eye like a hawk や不良老年の偽惡ぶりを發揮する「野卑に老いた意地惡男」 the wild old wicked man の立場があつた。

Slow decay of blood,

イエイツと佛教思想（伊 藤）

Festy delirium
Or dull decrepitude,
Or what worse evil come——

The death of friends, or death
Of every brilliant eye

That made a catch in the breath——
Seem but the clouds of the sky
When the horizon fades;

Or a bird's sleepy cry
Among the deepening shades.⁽⁴⁾

と五蘊幻身 幻何究竟 廻趣眞如 法還不淨を批較してみるにイエイツの詩には生々しい人生のドラマが含まれていて、靜穩な悟りの境地に身をおいてしみじみとした感慨をうたう證道歌ではない。イエイツの詩は騒々しい生な己れの現實の血の合唱をへて、嵐のよぎつたあとのさわやかさを自然のふところの中で靜かにうたつてゐる。しかしたとえイエイツと佛心とは逕庭があつても、毀れた器物の底に溜つた水にも佛日は宿る道理を思ふ可きである。

二

イエイツは存在の寂しさをうたう。

イエイツの藝術は故に存在することの淋しさとあがきから

芽ばえたのである。彼は存在者の孤獨感から「存在」及び「時間」の開拓者になつたのである。私はイエイツの詩文を用いて禪思想を述べるつもりはない。若し禪について述べるとすれば、どこまでもイエイツ的禪であつて、東亞の禪匠ののこした語録に見える思想に契證することによつてイエイツに禪思想ありと宣傳する愚をあえておかしくはない。禪はもつとユニバーサルなものであり、禪悦は深く強く生きるところに湧き、又その人の生に附隨した知恵であり、生きる意味の創造である。彼が民族に根ざした詩人であればあるほど、われらは深い愛着を彼におぼえ、また彼が民族生粹の思惟者であればあるほど、われらに親しみが増大するのである。これは個をほりさげた所に全體がある證據であらう。われらは彼此の源底に深く手をにぎりしめあつてゐる人間性の連帶をしてゐるからである。遭遇われらはのぼりつめた頂點での出會がしらで互に驚歎し、またよろこびもするのである。

固り、イエイツは青春期から、Sinnett の The Occult World, や Esoteric Buddhism ⁽⁶⁾ をよみふけり、ブラバツスキー夫人の降神會の門に投入したり、自己の藝術表現の開拓の點からも我國の民間信仰色の濃い「謠曲」や「源氏物語」をフエノロサ、及びヴェーレー譯でよみ、大拙氏の Zen Buddhism ⁽⁶⁾ を熱心によんだ。又中國の繪畫を好み、タゴール及びヒンズー教の聖者らに會い、彼らの譯文に序文をよせ、譯

文に朱筆をとつた。また佐藤醇造から譲りうけた日本の古刀を愛し、幾篇かの詩に元重の劍をうたつてゐる。

併し、彼の生活の根幹は藝術への表現意欲を得ることと人生の探究と意味の開拓者たらんとしていたことである。

三

イエイツの生死觀と晩年の達觀については特に考える可きものがある。存在することが孑然として感ぜられるイエイツには己れが中心となれるあらゆる存在がほしかつた。己れの完全性を唯一無二と思ひ、あらゆる存在が己れに参加してくれるようにとせがむヘロイックな氣魄が彼にはあつた。これが彼のいう「セルフ」であつた。この「セルフ」が支配する世界が彼の理想郷であつた。All creation shivers / With that cry ⁽⁸⁾ と彼はうたうが、彼は自我と宇宙とのコレスpondするそのあかしをもつて他人に彼の藝術を頷かしめようとした。彼の共譯したウパニシャッドにはかかる我的假面を次の如く説明している。

knowing that the individual self, eater of the fruit of action, is the universal Self, maker of past and future, he knows he has nothing to fear. ⁽⁹⁾

われらは人間のあらゆる點でも完全であらうとする欲求が近代詩人イエイツにも見出されるのであると知る。佛教では

かかる志を菩提心と教える。試みに揚げれば「口を開き、手を擧ぐれば、法界宮を震かし云々」⁽¹⁰⁾という境地と、Alex

Zwerdly 等が述べる如く the escape from the wheel of existence ⁽¹¹⁾ がイエイツ文學の主題であつた如く、慥にイエイツにはかかる肉奥的な精神の欲求からくる epical mood の支配する詩歌を好み、又それらを彼は次々と生んだのである。

Grant me an old man's frenzy, / Myself must I remake /
Till I am Timon and Lear / Or that William Blake / Who
beat upon the wall / Till Truth obeyed his call: ⁽¹²⁾

というように、眞理までもが「自我」の大度量にあつては人爲に順うのであるとイエイツの自信を培養してくれたのはブレイクであつた。イエイツは死のどたんばまでかかるイメジイによつて「我意」を通そうとしたのである。彼の死に對する心構えは次の詩行によつても窺知られる。

But he kicked before he died. ⁽¹³⁾
He did it out of pride.

イエイツの人生に對する不満は次第にぬぐいさられてしまつてゐる。しかし彼の理想は物質と精神との一致であつた。

異常においつめられた時、主義が強く働く時には人は物質も精神の一部であると感じるのである。彼のいう All Asiatic vague ⁽¹⁴⁾ immensities が生命に變るのである。物質は精神のすみかである。肉體は美的であるところに精神を支えるもの

である。ところが、肉體は一時的な快樂を人間にあたえるだけで衰える。

イエイツは Byzantium 詩二篇で、靈魂の不滅をうたわなければならなかつた。「肉體の襪襪に皺が一つ増えることに一層高らかにうたう」⁽¹⁵⁾——lauder sing/For every tatter in its mortal dress といふのが彼の詩魂であつた。

イエイツは生と死を諦らかに觀るところから出發した。その結果は T・S・エリオットが death resembles life というよりもつとドラマティックに生と死を把握することになつた。イエイツは墓碑銘を自から撰じて、

Cast a cold eye
On life, on death ⁽¹⁶⁾
Horseman, pass by,

とうたつた。「駒走らす人」とは勿論己れの投影であつた。

道元も「生死をはなれ佛となるなり」といつてゐるに思ひあわせると、彼は生にも死にも執着しなくなつたのである。

實に西洋人が生と死を一束に考えるのは注目値することである。かくの如きイエイツの生死觀をどのように解してもさしつかへはない。けれどもこれが彼の禪悦であつたと私は思いたい。彼にとつては生も死も廢履の如くであつた。J・I・M・スチアートの「イエイツの殘存した精力の部分が逆説的可能性の直接的な探究へと向つた。」⁽¹⁷⁾という如く、イエイツ

は、'Thought hid in thought, dream hid in dream' を考える。又次に掲げる詩行によつても彼の思惟性の本質が逆説的可能性を追求するものであつたと了解されよう。

Many times he died, / Many times rose again. — He knows death to the bone — / Man has created death. ⁽¹⁸⁾彼の逆説的探究の表白にしたがへば、死というものは元來あるものではない。死は人間がつくつたものであり、生そのものであるという。人のつくつた死は人がもつとも知つている筈であるという。イエイツの唯心思想と萬有觀は生と死が一如であること、一瞬の中に多劫があると教える。したがつて、現在の生に多劫が含まれてゐるというのである。彼のうたう Anima Mundi の考えからすれば、宇宙的意志によつて人が生れるのである。或る批評家は His self wants to repeat all the deeds and thought that he has once lived. と述べてゐる。又次の如き生死の相續をうたつた詩旨は明らかにインドの時の圓環思想を承けつたものであり、イエイツは詩中にインドの聖者 Mohini Chatterjee に祈る可きかをたすねてゐる。そして次の詩行はかの聖者の思想を踏えたものでも。

Birch is heaped on birth, / That such cannonade / May thunder time away, / Birth-hour and death-hour meet, / Or as great sages say / Men dance on deathless feet, ⁽¹⁹⁾

イエイツは人間の現實を觀破して、生のはかなさ、むごたらしさを經て生の玄妙さをうたうが、佛教ではこのありのままの相を以つて、出離への道を教える。平安頭初の空海は「四生の盲者は盲なることを識らず、生れ生れ生れ生れて、生の始めに暗く、死に死んで死の終りに冥し」と悟してゐる。これらは生といい、死といい謂ば鏡裏の魔軍を降伏せしめようとめざしている點で或は一致をみているのかもしれない。詩人イエイツはインド思想を承けつた死についての思想ばかりをうたつたのではない。

彼の生活の實感からにじみ出たものもつともリアルにわれらの心をうつ。例えば

Death and life were not
/ Till man made up the whole, / Made lock, stock and barrel / Out of his bitter soul, ⁽²⁰⁾

また、己れの墓碑銘を含んだ Under Ben Bulben という詩には彼が人の一生についての觀照を最もメタフィジカルにうたつてゐる詩行に出會う。

Though grave-diggers' toil is long,
Sharp their spades, thir muscles strong,
They but thrust their buried men ⁽²¹⁾
Back in the human mind again.

じつとイエイツの意圖するところは人生のアイロニーでもある。

つたろうが、世親も是諸識轉變、分別所分別、由此彼皆無、故一切唯識といい、信心銘にも「眞如法界他無く自無し」という如きに思比せられよう。

イエイツの詩文學には死にまつわる歡喜がうたわれている。イエイツは死にのぞんでも悲劇にあつてもかなしまない。イエイツの晩年の達觀は文明が假和合であつて、文明こそが人間の貪婪たる欲望の淵藪であるとき、文明は人間と共に滅しては興り、破壊と建設をくり返し、建設する者は愉快であるときイエイツは達觀した。

Civilization is hooped together, brought

Under a rule, under the semblance of peace

(82)
By manifold illusion:

All things fall and are built again,

(83)
And those that build them again are gay.

イエイツはもう悲劇のどたん場からは後退していつ、ものを遠くから見届ける立場にあつた。

Hector is dead and there's a light in Troy;

(84)
We that look on but laugh in tragic joy.

壯烈無比なるギリシャの悲劇にもイエイツは亡びゆくものにいたく悲しみを知るばかりではなく、却つて喜びがこみあげてくるのを覚えるのであつた。かかるイエイツの諦觀はまさに、

放之自然體無去住

任性合道遙絕煩惱

信心銘

の旨に適ひ、ここにも宇宙の戲曲化をもつて人間意識の創造を示した現代詩人の禪悅を窺い知ることができよう。

- 1 C. P. p. 305
- 2 Wade, Letters of W. B. Yeats. p. 917. To Ethel Mannin, Oct. 9. 2, 1938.
- 3 The Double Vision Of Michael Robartes etc., 參照 C. P. p. 192
- 4 C. P. p. 224~5
- 5 R. Elleman, Yeats. The man And The Mask p. 62~4
Esoteric Buddhism は解脱と羅漢果を得つて永世不死の生命を得たといふが説かぬところ。
- 6 W. B. Yeats And Japan by Shotaro Oshima p. 6 'I am at present reading with excitement Zuzuki's Essay in Zen Buddhism'
- 7 C. P. 265, p. 227, 231.
- 8 ibid., p. 221,
- 9 The Ten Principal Upanishads Put into English by Shree Purohit Swami and W. B. Yeats, Faber
三種悉地破地獄轉業降出三界秘密陀羅尼法
W. B. Yeats: Variation On The Visionary Quest p. 91.
- 10 C. P. p. 347,
- 11 C. P. p. 321.
- 12 C. P. p. 375,
- 13 Sailing To Byzantium C. P. p. 217.
- 14 ibid. p. 401.
- 15 Oxford History of English Literature, Edited by F. P. Wilson and Bonamy Dobrée 1963, p. 412.
- 16 C. P. p. 264, 19 ibid. p. 280 20 ibid. 223
- 17 ibid. p. 398, 21 ibid. p. 333 22 ibid. p. 339,
- 18 ibid. p. 337.
- 2421 18